

六車由美 著

▶ 神、人を喰う

人身御供の民俗学

3・3刊 四六判274頁 本体2500円

新曜社

今日の供儀論の
水準を示す力作

意欲的で論争的な論文集

礫川全次

本年三月、同会の六車由美氏による供儀論、『神、人を喰う』が刊行された。六車氏は、大阪大学大学院で中村生雄氏に師事し、現在は、赤坂憲雄氏が所長を務める東北

の研究会が積み重ねられてきたという。以来現在まで、計十一回の研究会が積み重ねられてきたという。

①加藤玄智(神道学者)と柳田國男の論争(一九二二)を紹介している。②柳田が、一時、フレイサーのからの影響による供儀論を展開し、のちにそれを放棄した点に触れている。③皇居人柱事件(一九二五)を紹介している。④同事件を機に刊行された『中央史壇』『人類犠牲研究』特集号(一九二五)を紹介している。⑤同特集号所載の中山太郎(民俗学者)の論文「人身御供の資料としての『おなり女』伝説」を、高く評価している。

特に⑤に注目した。氏は中山太郎の論文について、『金枝篇』での穀神論に全面的に拠っているとはいえ、この時期に既に農耕と供儀との密接な関係が明快に論じられていることに、私は新鮮な驚きを感じる。対して、異例ともいえる高い評価である。終章の「人柱・人身御供・イクエニエ」には、イクエニエと人柱とを峻別する視点が示される。これによって蒙を啓かれた読者は評者だけではないだろう。なお、この章は、赤坂憲雄氏の供儀論に対し、著者が「疑問」を提起した一文でもある。ここで、六車氏は、「人身御供譚」の意味を、「希薄化した生の実感をもう一度身体に呼び覚ますもの」と位置づけ、これを赤坂氏における「闇の歴史を再現、追体験する」の歴史を再現実、追体験とするもの」という位置づけと対比している。たしかに著者の人身御供論は、赤坂氏のそれに比べればあまり「毒抜き」が施されていないし、それだけにまた説得力もある。第一・三・四章は、各論であると同時に相対的に独立した論文とも言える。いずれも実地調査のない一次資料を踏まえた手堅い業績である(特に、第一章「人身御供の祭りに、第一語り」と暴力は力作)。(歴史民俗学研究会代表)

イクエニエ・人身御供・人柱等は、しばしば伝説に登場する話題であり、文化人類学においては供儀という用語で論じられてきたテーマである。ところが、柳田國男の影響下にある日本の民俗学の世界では、柳田自身がこれらの問題を論じていた二時期を除き、なぜかこれらは、扱われることのないテーマになっていった。

赤坂憲雄氏が、その編著書『供儀の深層へ』の冒頭で、

「柳田の明治・大正期の思想に顕著な、供儀論の影は、じつはフレイサーの『金枝篇』その他の著作がもたらしたものである。柳田が曖昧なまま放棄してしまったその西洋的な供儀論との困難な戦いをいま／＼ここから開始することしようか」と書いたのは、実に一九二二年のことであった。

本書は序章・第一～四章・終章の計六章からなるが、とりわけ第三章と終章では、著者の主張が積極的に語られる(論争的な内容も盛り込まれている)。

序章『「人身御供」はどのように論じようか』(書き下ろし)では、近代日本の学問的世界で、イクエニエや人柱がどのように論じられてきたかが概観される。評者は、次の諸点に注目した。

①加藤玄智(神道学者)と柳田國男の論争(一九二二)を紹介している。②柳田が、一時、フレイサーのからの影響による供儀論を展開し、のちにそれを放棄した点に触れている。③皇居人柱事件(一九二五)を紹介している。④同事件を機に刊行された『中央史壇』『人類犠牲研究』特集号(一九二五)を紹介している。⑤同特集号所載の中山太郎(民俗学者)の論文「人身御供の資料としての『おなり女』伝説」を、高く評価している。